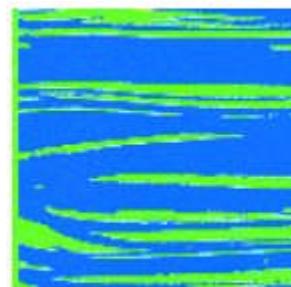


日本行動分析学会ニューズレター

J-ABAニューズ



2009年 春号 No.54 (2009年6月30日発行)

発行 日本行動分析学会 理事長 藤 健一
〒540-0021 大阪市中央区大手通2-4-1 リファレンス内
FAX : 06-6910-0090 (日本行動分析学会事務局と明記) URL : <http://www.j-aba.jp/>
E-mail : j-aba.office@j-aba.jp

| | |
|--|------------|
| 就任のご挨拶 | 理事長 藤 健一 |
| 第6回学会賞・実践賞(2008年度)の受賞者が決定しました! | 浅野俊夫・島宗 理 |
| 第27回年次大会、もうすぐです | 園山繁樹 |
| Local Beer SIG誕生? -ABAI2009を終えて- | 杉山尚子 |
| Contingencies of ABAI | 田中善大 |
| 忘れられない体験の連続 | 堀麻佑子 |
| 行動分析で世界を救え: Save the world with Behavior Analysis! | 竹島浩司 |
| 自主公開講座「第2回茨城行動分析研究会」報告 | 園山繁樹 |
| 事務局からのお知らせ | 大河内浩人 |
| 広報委員会からのお願い: ニューズレター発行通知について | 園山繁樹 |
| 編集後記 | ニューズレター編集部 |

就任のご挨拶

理事長 藤 健一

空梅雨ぎみの空模様ですが、会員の皆様にはお変わりなくお過ごしのことと思います。日頃より、行動分析学会の諸活動へのご支援とご協力とを賜り、誠にありがとうございます。

さて、昨年度に実施されました理事選挙および理事長選挙の結果、小生ははからずも再度理事長に選出され、今期の理事長としての任に就くこととなりました。その重責を考えますと、この3年間の内には何度となく決断を要する場面に遭遇することと思いますが、会員の皆様のご支援を得て職務を全う致したいと存じ

ます。

去る6月6日(土)に開催されました2009年度第1回理事会におきまして、今期(2009年度~2011年度)理事会の目標と課題とを提案し、承認をいただきました。設定した目標と課題は次のとおりです。

目標1 行動分析学の研究の進展と教育の普及を担う学会として、その運営形態をより洗練するとともに、学会の基盤をより強固にすること。

課題

- (1) 各委員会の役割の一層の明確化と、各委員会業務の立案・実施過程の可視化。
- (2) 各委員会の機能の日常的発揮のための事務局業務整備。
- (3) 会費納入率の向上策の実施。
- (4) 広報機能・HP 更新維持体制の強化。
- (5) 年次大会開催についての学会支援の強化および新方式による年次大会開催の研究。
- (6) 「行動分析学研究」の定期刊行および迅速な投稿・査読システム的设计と実現。
- (7) 学会の研究所産の公開と利用の促進。

目標 2 日本行動分析学会創立三十年記念事業の準備。

課題

- (1) 学会創立は 1983 年なので、創立 30 年目は 2012 年、創立 30 周年は 2013 年となる。いずれにせよ今期理事会の任期満了後であるが、記念事業実施について検討する。

目標 1 は、行動分析学会の規模に深く関わるものです。学会員数は、おそらくこの 3 年間で 1000 名を超えるのではないかと考えられます。会員数の増大に伴って、学会の機能を維持する基本的な事務業務量は指数関数的に増大すると考えても、決して大げさではありません。この隘路を今のうちに整備しておくことは、5 年後 10 年後の学会発展の礎となると思います。まさに、それは「今」なすべき事のひとつであると判断するに至りました。課題は多岐にわたっておりますが、委員会体制の整備(1)、(4)、(5)、学会の研究所産の活用(6)、(7)、事務局業務の整備(2)、学会収入の安定化(3)といった課題に整理されるかと思えます。

目標 2 は、行動分析学会の来し方行く末を検討する機会の提供をはかります。いずれ、7 月の年次大会の総会で、提案致します。

今期の理事会および委員会・事務局体制は、別表 1 のとおりです。基本的には昨期理事会での委員会体制と同じですが、次の点において違いがあります。

まず、委員会の担当する業務内容を整理しました。従来の広報委員会と国際・渉外委員会とを合併して、(新) 広報委員会としました。また、年次大会企画委員会を新設しました。従来の年次大会開催は、開催校

にその関連業務全般の実施を依頼しておりましたが、昨今の大学や研究機関の諸条件が年々厳しくなってきたことは、年次大会開催のスケジュール策定にも影響が出始めております。これの解決策のひとつとして今期理事会では、年次大会開催に関わる諸問題の研究、解決策の提言、そして実行機能を持つ委員会として、年次大会企画委員会を新設致しました。

次に、委員会構成を、変更致しました。昨期の委員会は、常任理事により構成されておりましたが、今期はすべての理事および常任理事が、いずれかの委員会の構成委員として関わるようにしました。

各委員会のこの 3 年間の主な課題は、別表 2 のとおりです。各委員会の課題についても、順次常任理事会や理事会の検討を経て、総会で提案・検討される予定です。

行動分析学会 30 年記念事業については、時間的にはあと 4 年間ほど余裕がありますが、計画と立案について早めの準備を考えたいことと、次期理事会(2012 年度～2014 年度)との交替の時期的問題から、今期理事会においてその大枠の設計をしておこうと考えました。ちなみに、前回の創立 20 年記念事業と記念大会(日本大学藤沢キャンパス 2002 年 8 月 22 日～24 日)については、2000 年 10 月 14 日の第 86 回常任理事会(駒澤大学)で検討が開始されています。

今期理事会の目標設定については、目標の単一明瞭性を重視しました。課題は複数あっても、それぞれの解決はひとつの目標の達成につながるよう設定しました。また、3 年間で目標がどの程度達成されたかを判定しやすいように、設定をしました。この 3 年間、会員の皆様とともに、今日よりはよりよい明日の行動分析学と行動分析学会とを目指して参りたいと存じます。どうぞ、この 3 年間、よろしくご支援を下さいますようお願い致します。

(別表 1)

日本行動分析学会(2009～2011 年度)理事会および委員会、事務局体制

○理事長：藤 健一

○機関誌編集委員会

委員長・編集長：島宗 理(常任理事)

委員：真邊一近(常任理事)、伊藤正人、坂上貴之、

- 奥田健次 (各理事)
- 研究教育推進委員会
委員長：浅野俊夫 (常任理事)
委員：井澤信三 (常任理事)、松見淳子 (理事)
 - 出版企画委員会
委員長：武藤 崇 (常任理事)
委員：望月 昭 (常任理事)、青山謙二郎 (理事)
 - 広報委員会
委員長：園山繁樹 (常任理事)
委員：野呂文行、青山謙二郎 (各理事)
 - 倫理委員会
委員長：森山哲美 (常任理事)
委員：中野良顯 (理事)、鎌倉やよい、大石幸二、
吉野俊彦 (各会員)
 - 年次大会企画委員会
委員長：中島定彦 (常任理事)
委員：杉山尚子、井上雅彦 (各理事)
 - 監事
清水直治、山岸直基
 - 学会事務局
事務局長：大河内浩人 (常任理事)
事務局長補佐：武藤 崇 (常任理事)
事務局員：土田宣明、吉岡昌子、上原誠子
業務委託：(有) リファレンス
-
- (別表2)
行動分析学会理事会および委員会(2009年度～2011
年度)と役割と課題
- 機関誌編集委員会
 - ①「行動分析学研究」の年2回刊行
 - ②編集業務の外部委託についての研究と実スケジュールの検討
 - ③安定的投稿数の確保の方策確立
 - 研究教育推進委員会
 - ①学会企画シンポジウムなどの立案と実施
 - ②教育セッションの立案と実施
 - 出版企画委員会
 - ①出版企画の継続分(藤田企画・前委員会企画)の促進
 - ②新規出版企画の提案
 - 広報委員会
 - ①「ニューズレター」の年4回刊行
 - ②学会HPの随時更新
 - ③学生会員の海外学会参加助成事業およびABAI窓
口
 - 倫理委員会
 - ①倫理委員会活動
 - ②倫理についての広報活動
 - 年次大会企画委員会
 - ①年次大会開催方式の研究と提案
 - ②年次大会開催にかかわる各種業務の支援
 - ③年次大会における各種学会企画の実施
 - 事務局
 - ①総会・理事会・常任理事会など諸会議の準備・運
営
 - ②各種資料の収集・分析・保存
 - ③収入・支出の管理
 - ④著作権の管理
-

第6回学会賞・実践賞(2008年度)の受賞者が 決定しました!

担当常任理事 浅野俊夫・島宗 理

3月14日、常任理事会にて選考委員会が開催され、日本行動分析学会第6回学会賞(実践賞)の受賞者が武田建先生(関西福祉科学大学)に決定しました。

実践賞は我が国における行動分析学を応用した優れた実践の普及を目的として設置された学会賞です。社会的な問題の解決のために行動分析学を活用し、実績をあげている個人や組織を、

会員・非会員を問わず選考対象にしているところに特徴があります。

武田先生は関西学院大学において社会福祉やカウンセリングの専門家として教鞭をとるかたわら、同大学や附属高校のアメリカンフットボール部を監督として率い、全13回の全国大会優勝という素晴らしい成績をおさめられました。また、そこで活用されたコーチングの方法論を『コーチング：人を育てる心理学』（誠信書房、1996）や『武田 建のコーチングの心理学』（創元社、2007）で一般読者向けにわかりやすく解

説され、科学に基づいた行動的コーチングの重要性を社会に広めた業績が高く評価されました。

授賞式および受賞講演が日本行動分析学会第27回年次大会にて行われます。皆さまお誘い合わせの上、ぜひご参加下さい。

【授賞式と受賞講演】

日時：2009年7月11日（土）16:10-17:40

場所：筑波大学・大学会館 講堂

第27回年次大会、もうすぐです

第27回年次大会実行委員長 園山 繁樹（筑波大学）

7月10日（金）～12日（日）の会期にて、筑波大学大学会館において、第27回年次大会を開催いたします。会員の皆様にはすでに発表論文集もお送りし、参加・発表のご準備をいただいていることと思います。2年前に、東京の秋葉原からつくばエクスプレス（TX）が開通し、最寄りのつくば駅まで最速45分です。電車の乗り心地も快適です。

以下では、直前のこの時期に特にお知らせすべき3点に絞って記させていただきます。

【新型インフルエンザ対策・対応】

つくば市でもすでに感染者が確認されていますが、大学関係者には感染が確認されていないこともあり、これまで休講や大学施設の使用禁止などの対応はありませんでした。しかし、万一の事態に備えて、6月6日開催の今年度第1回理事会において必要な対策等が決定されましたので、主な事柄をお知らせします。（大会ホームページも必ずご覧ください）

(1) 大会会場（筑波大学大学会館）が使用禁止になった場合：

①大会の開催を発表論文集による誌上発表の形態とし、会場での発表等は行わない。

②払込済みの予約参加費・懇親会費・教育セッション参加費については、返金する。ただし、ポスター発表筆頭者及び連名者については、予約参加費の返金額を半額とする。返金方法については、実行委員会より該当者に問い合わせる。

③必要な情報の周知は大会ホームページを通じて行う。

(2) 大会会場が使用でき通常開催となった場合：

①会場校（筑波大学）における対策を大会ホームページに掲載し、会員にもその実施を依頼する。

【教育セッションの受講申込延長】

教育セッションは各セッション80名を定員としていますが、現在のところ余裕がありますので、大会受付にて定員に達するまで受付をします。

【懇親会の参加申込延長】

懇親会も約30名分余裕がありますので、大会受付にて参加申込をお受けします。

無事に大会が迎えらることを祈りつつ、皆様のご参加をお待ちしております。

<報告>

Local Beer SIG 誕生？ —ABAI2009を終えて—

杉山 尚子（山脇学園短大／前国際担当理事）

2009年の第35回ABAI年次大会は、5月22日から5月26日までの5日間、砂漠の町アリゾナ州フェニックスで開催された。大会の参加者は年々増加し、今年は5000人を超え、発表件数も1635件と過去最大を記録、プログラムは昨年の448ページから、一挙に608ページに増大した。ABAIは第1回大会から、常に4つ星級のホテルを会場とし、宿泊と大会会場とがセットになった職住接近で運営されてきたが、急増する参加者と発表件数の前にはその伝統を維持する事は不可能となり、今年はずいぶん、大会史上初めて、コンベンションセンターを会場に、宿泊はそこから歩いて5分ほどのホテルという職住分離方式になったのである。砂漠の町フェニックスは、5月末でも気温は平気で35度になる（予報では40度の日もあった）。炎天下、5000名が黙々とホテルとコンベンションセンターを往復したのであった（元会長のJack Marrは紳士の微笑みを見せながら、“I hate Phoenix”と言った）

一方、例年、30名ほどが渡航する日本からの参加者は、新型インフルエンザ禍により近年になく低調。特に学生会員の発表キャンセルが目立つ中で、ひとり気を吐いたのは関西学院である。もっとも、今年の参加者が少ないのは、インフルエンザだけではなく、8月にオスロで開催される国際会議に参加するため、フェニックス大会を見送った会員もいたようだ。

さて、大会3日目の夜、午後10時（午前の間

違ではない）から夜中の12時までABAI Expoというイベントが開催される。これは、ABAIに登録する各国の支部学会、米国内の各州の支部学会、SIG (Special Interest Group といひ、行動分析の各研究分野が組織するもので、現在33分野がある)、大学院のプログラムを持つ大学などが、自分たちの活動をポスター展示し、交流を深める行事である。日本行動分析学会は、90年代からこの行事に参加し、J-ABAの活動をポスターで紹介してきた。私にとって、このABAI Expoには格別の思い出がある。2度目に参加した1985年、当時3大メッカの一つといわれたウェスタンミシガン大学に興味があった私は、そのポスターの前に立つ、一目でラテン系と知れる黒髪の美しい女性に話しかけた。私の英語が不自由であることに加えて、相手もスペイン語が母語であり、情報交換は容易には進まず、気がつくとも2時間話し込んでいた。これが、現在の辣腕事務局長（かつて赤字転落目前のABAIを1年で2000万の黒字学会にV字回復させた）のマリア・マロットの若き日の姿であり、以後われわれの友情は20有余年に及んでいる。

このポスターに近年異変が起こっている。J-ABAのポスターを訪れるのは、初期の頃は、日本に興味がある外国人学生／研究者や、日本人学生を抱えている研究者、日本に訪問経験のある研究者たちであったが、いつの頃からか、日本で行動分析学の教育を受けた経験のない在



(写真1) 本のプレゼント

米の日本人学生が、ポツリポツリと現れるようになったのである。彼らの中には、日本で行動分析学の研究や実践が行われていることを、ポスターを見るまでは知らなかった者さえいた。そして、いつしか、J-ABA のポスターを前にして、それらの在米学生と日本から参加した学生とが貴重な情報交換をするようになったのである。前者は、帰国後の就労のため、後者は米国の大学院や企業の情報を集めるために。

そこで、日本行動分析学会は、2007 年度から在米の日本人学生のために、Expo を利用して日本語書籍の無償提供を開始した。会員から自著を寄贈の形で提供していただき、希望する在米の学生にプレゼントするのである。3 年間で、大河内浩人、奥田健次、小野浩一、島宗理、中島定彦、武藤崇、山本淳一の諸先生方がご協力下さった他、杉山も協力を申し出た。今年も5冊の書籍が揃い、争奪戦が予想されたが、企画も3年目に入り、過去に恩恵に預かった者が上手に譲りあって、専門分野にふさわしい書籍がそれぞれの手に渡った(写真1)。

せっかく出会った若き行動分析家たちの情報交換の機会をさらに増やすために、何かもつとできることはないか？ 私は実は 1993 年以来上面発酵麦酒の研究と実践(飲むこと)を趣味にしており、ABAI で訪米の折には、何人かの親しい学生たちと当地のマイクロブリュワリー(地ビール醸造所併設パブ)を最低一カ所訪れ



(写真2) ホテルの前で全員集合!

ることを習慣にしていた。そうだ、これからは皆で行こう。ビヤパブなら大きなテーブルもあり、リーズナブルな値段でおいしい麦酒と食事が楽しめる。数年前からはじめたこの企画は、今年はいっそう充実した。昨年から幹事に名乗りをあげてくれたウェストバージニア大学の林裕介君と黒田敏数君は、私が日本を発つ前に、今年訪問できそうな近隣の醸造所を探し、情報を送ってくれた。首謀者の都合で決まった日程は、ちょうど ABAI Expo の翌日。Expo に集まった学生に情報は伝えられ、何と両国で活躍する学生と自称若手教員たち全員が参加してくれたのである。7時にロビーに集合し、行き先は、Sonora Brewhouse。黒田君の手配でタクシーに分乗し、夜の10時をとうに回るまで、フェニックスの夜は更けたのであった。来年も続けよう！ 名づけて、**Local Beer SIG!** 親日家であり、ご自分で自家醸造もなさる W.L. ヒュワード先生に名誉会長になっていただこうではないか！ 行動分析家はただ酒を飲んでいるだけではだめだ。いつかは、飲酒行動に関する研究もしてポスター発表もしよう！と妄想は膨らむのであった。女性陣はこの後、ヒュワード先生ご夫妻の豪華なスイーツ(ABAI の役員は期間中ホテルからスイーツが無償で提供される。これも辣腕事務局長マリア・マロットの戦利品)を見学し、「いつかこの中の誰かが会長になって、みんなでスイーツに泊めてもらおうね」と笑顔で約束し、散会したのであった。

なお、写真2はホテルに戻って玄関前で撮影したものである。シャッターを押してくれた通りすがりの人も酔っ払っていて、ぶれた写真になっています。

本年度参加者：＜日本から＞石井拓（慶應義塾大）、大対香奈子／田中善大／野田航／堀麻佑子（関西学院大）、大矢幸弘（国立成育医療センター）、奥田健次／須田泰史（桜花学園大）、橋

本一成、杉山尚子（山脇学園短大）＜米国在住＞糸井まどか（オハイオ州立大）、林裕介／黒田敏数（ウェストバージニア大）、是村由香（ノーステキサス大学）、小山（ワシントン州立大）、斉藤真耶（南イリノイ大）、竹島浩司（Fremont Unified School District）、Nepo かおり（PAAL教育プログラム主宰）、野口美幸（オレゴン大）、鷲尾幸子（バーモント大）

<ABAI体験記>

Contingencies of ABAI

田中 善大（関西学院大学大学院）

このたび、日本行動分析学会から「日本在住学生会員のABA/SQABの参加に対する助成」を受け、今年の5月にアメリカのフェニックスで開催された第35回国際行動分析学会（ABAI）において研究発表させていただきました。ABAIにおいては、自身の研究発表の機会だけでなく、各種のプログラムに参加し、行動分析学の領域における最新の研究成果に触れる機会を得ることもできました。今回の助成をいただいたこと、心より感謝いたします。

ここからは、私のABAIの体験を紹介させていただきます。ABAIへの参加は今回が3回目になります。私にとってABAIは、アメリカ行きの飛行機から始まります。機上で過ごす10数時間の中で、私が主に行なう活動は、ABAIのプログラム集をチェックすることです。ABAIのプログラムの多さは圧倒的です。学会中は、30数個の会場で、1日中口頭発表のプログラムが行なわれています。そのため、A5サイズのプログラム集の厚さは、3.4cmで、厚めの本か、辞書のようなです。その辞書に載っている500以上のプログラムのすべてが行動分析に関連しているので、ABAIを満喫するためには、事前にかなり吟味す

る必要があるのです。1回目のプログラム集チェックは、興味を引かれたプログラムすべてに、とにかくチェックをつけて、そのページの端を折っていきます。ドックイヤーを付け終わった段階で、今回のABAIも楽しくなることを確信しました。その後、時間帯が重なっているプログラムの中で最終的に行くものを決定します。「これ！」と決められる場合もあれば、なかなか決められない場合もあるので、迷ったらそれはとりあえず保留にして、次に進みます。これを何度か繰り返していると、知らない間に機上での時間がかかり経過しています。これが私にとっては、ABAIへ参加する際の最初の楽しみです。

フェニックスに着いていよいよABAIに参加という段階で、まず驚いたのが、会場の大きさです。これまで私が参加したABAIと違って、今年はホテルではなく、コンベンションセンターを借りての実施だったため、とにかく会場が広かったです。会場の手前の電光掲示板には、宣伝用のコーラの表示の後に“Welcomes Behavior Analysis”の文字が表示され、気分も盛り上がります。

ABAI では、さまざまなプログラムに参加しました。自分の中の大まかな区分けは、「現在の研究テーマに関連するもの」「普段はあまり触れる機会のないもの」そして、「“有名人”の発表」です。

ABAI は、アメリカでの開催ですから、日本では普段なかなか話を聞く機会がない著名なアメリカの行動分析家の発表を体験することができます。今回も、“Functional Analysis”の Brian Iwata 先生、“Changing Cultural Practice”の Anthony Biglan 先生、“PRT”の Robert L. Koegel 先生、“ABLLS”の Mark L. Sundberg 先生など、各分野の代表する研究者の“生”の発表を聞くことができました。特に Sundberg 先生の発表は、“Verbal Behavior Milestones Assessment and Placement Program (the VB-MAPP)”という自閉症児に対するアセスメントツールに関するデータの発表で、新しいアセスメントツールとそのデータの積み上げをその開発者自身から聞くという貴重な体験ができ、印象深かったです。

「現在の研究テーマに関連するもの」としては、「行動コンサルテーション」「スタッフトレーニング」のシンポジウムに参加しました。私は現在、保育士の方を対象に研修プログラムの開発及びその効果の検討を研究のテーマとしています。参加したシンポジウムでは、新しいアセスメント方法や介入方法等についての情報もあり、研究を進めるにあたって役立つアイデアやヒントを得ることができました。

私自身の発表は、“Effect of Group-oriented Contingency Management on Disruptive Behavior of Children in a Regular Classroom”というタイトルで、小学校の普通学級で、集団随伴性を用いて行った学級介入のデータをポスター発表させていただきました。ポスターの前で立ち止まった人には、とにかく話しかけるといことを目標に発表を行い、たくさんの方と意見交換することができました。実践的な内容



だったこともあり、研究者の方だけでなく、実践家の方もたくさん発表にきていただくことができました。ABAI というのもあって、ポジティブなコメントが多く、十分に強化されたように思います（今後、研究行動、発表行動が増加する予定です）。

今回、自身で発表をしていて、また各種プログラムに参加する中で、BCBA（認定行動分析士）を取得している人が大変多いことに気づきました。また、ポスター会場にある求人掲示板を見つみると BCBA の取得者を対象にしたものが多数掲示されていました。ABAI への参加を通して、アメリカでは、「行動分析家」という職業の категория がしっかりと存在することを実感しました。

この他にも、ABAI 恒例の杉山先生主催「地ビールの会」に参加したことなど、書き出すときりがないですが、ABAI はその規模や内容など、参加してはじめてわかること、感じることであり、再認識しました。「ルールよりも随伴性」この言葉を実感する充実した数日間でした。

<ABAI体験記>

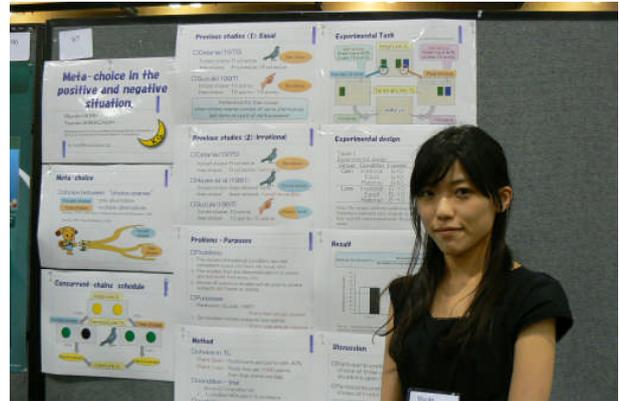
忘れられない体験の連続

堀 麻佑子（関西学院大学大学院）

日本行動分析学会から「日本在住学生会員のABA/SQAB 参加に対する助成」を受け、今年の5月にアメリカ、Phoenix で開催された第35回国際行動分析学会に参加してきました。Phoenix は澄み渡る青い空と突き刺さるような強い日差しが印象的で、会場に着くと Phoenix の気候も手伝い、気分が高揚し期待に満ちてきました。そして、初日に感じたその期待通りの刺激的な5日間となりました。

今回の ABAI への参加は私にとって初めてのポスター発表であり、もちろん初めての国際学会でした。初めてのポスター発表が海外ということで不安はあったものの、海外の大きな学会で発表してみたいという気持ちが先行し、一歩踏み出すことにしました。私の発表は「選択行動」というテーマで Experimental Analysis of Behavior のセクションで、ポスター発表最終日の夜に行いました。緊張しながらポスターの前に立っていると、入れ替わり立ち替わり様々な方が私のポスターを見てくださり、質問や助言をしていただきました。私が説明に詰まっても根気強く聞いてくださり、とても嬉しかったです。しかし、私の英語能力が足りないばかりに、せっかく質問をいただいても伝えたいことが伝わらないことや、深く突っ込んだアカデミックな話がなかなかできないことがあり、非常に悔しい思いをしました。普段、日本にいても英語論文を読む度に英語能力を向上させなくてはと思ってはいましたが、今回の ABAI で改めてその必要性を痛感しました。

そして、ABAI の魅力はやはり Symposium や Paper Session、Work Shop など数多くのプログラムが充実している点だと思います。5 日間も



靴に入れて持ち歩いたら、肩がこってしまうような分厚いプログラムには、タイトルだけ見てもワクワクするようなプログラムがつまっています。基礎分野から応用分野まで幅広い研究発表が連日同時進行で行われます。私の研究テーマは選択行動ですが、その中でも「強制選択と自由選択」といって、「ヒトは1つの選択肢しか与えられないよりも、選択肢が多く与えられる方を好む」という研究を行っています。まさに、ABAI のプログラムは自由選択、選びたい放題です。選択肢が多すぎて困ってしまう時もある程です。自身の研究領域に近いものだけではなく、あまり自分が知らない領域でも、著名な先生の招待講演など、時間が許す限り聞きに行きました。また、論文の中でしか知らなかった著名な先生方を生で見ることができるとも ABAI の魅力の1つです。特に私の場合は Catania 先生の論文を何度も何度も読んでおり、会場で先生の姿を拝見したときの感動は今でも忘れられません。今回、何回か試みたのですが、あまりに緊張して声をかけられなかったので、次回こそは声をかけるというのが目標です。このように ABAI では多くの研究を実際に研究者の口から聞くことができます。しかし、私は目の前に非常

に面白そうな研究がたくさんあるのに、英語が聞き取れず研究の大枠しか理解できないということが多々あり、自身のポスター発表の時と同様に非常に悔しい思いをしました。今回の ABAI は非常に刺激的で楽しい学会ではありましたが、次回までに英語能力を向上させ、少しでも自身の研究を伝えたり、研究者としてアカデミックなディスカッションをしたり、多くの情報を吸収したいという目標をもつことができました。普段、日本にいと坦々と日々が過ぎていきますが、今回 ABAI に参加することでこれからの研究生活を見直すきっかけとなり、新たな目標を

持つことができました。これからも研究に励み、1年に1度 ABAI に参加したいと思います。

最後になりましたが、行動分析学会の助成をいただき、このような貴重な体験ができましたことを感謝いたします。また、今回の ABAI 発表では多くの方々にお世話になりました。嶋崎先生やゼミの先輩方、ゼミの仲間には英語でのポスター作成について多くの助言をしていただきました。関西学院大学の対先生、野田さんには現地で大変お世話になりました。この場をお借りして御礼申し上げます。ありがとうございました。

※ 今号から新しい連載「海外で学ぶ学生、海外で働く専門職」が始まります。この連載は51号で前国際担当の杉山尚子理事が予告されていたものです。最初にご寄稿をお願いした竹島浩司氏は、行動分析学全米3強のひとつであるWMUで学位を取得されたこと、そのまま米国に残って活躍されていること、読者のニーズが高い応用行動分析の分野であることなどから、杉山理事のご推薦をいただきました。新連載、乞うご期待(編集部)。

<新連載：海外で学ぶ学生、海外で働く専門職>

行動分析で世界を救え： Save the world with Behavior Analysis!

竹島 浩司, Ph.D., BCBA-D
(Fremont Unified School District)

私がアメリカに興味を持ち始めたのは、学部生時代でした。東京学芸大学臨床心理課程カウンセリング専修に入学後、心理学に大きな期待を持っていた私は、必要な講義を取っていくにつれ、講義内容が何となく自分にそぐわない、納得できないと感じ、満たされない気持ちでした。「何かをしなければ」という漠然とした気持ちの中、手を伸ばしたのがアメリカ留学フェアというものでした。東京で行われたこのフェアは、数十のアメリカの大学の代表者が集ま

って、留学希望の日本人学生に対して、ブースを作ってそれぞれの大学の個性を紹介するものでした。そこで、「Western Michigan University の心理学部 (以下, WMU) はアメリカでナンバー3に入る (心理学ではなく、行動分析でナンバー3に入るという詳細は省かれた)」という情報を得て、何も知らない私なりに1年の短期留学を決意しました。今から考えれば、行動分析を何も知らず WMU にたどり着いた過程は、偶然とは言えないような気がします。

学部生時代には、自閉症児の世話をするボランティアもしていたのですが、「特殊教育には興味がない」と思っていた私は、当時、東京学芸大学に障害臨床の課程で行動分析を教える先生がおられるとは、その存在すらも知らなかったのです。

学部生時代の WMU での短期留学は、日本の大学で見つけられなかった大きな目標を与えてくれました。徐々に英語に慣れ始めた 2 学期目には、著名な Dr. Michael 先生の講義を受講できることになりました（もちろんその時は Dr. Michael がどのように有名なかは知る由もなかったのですが）。講義後先生に質問をすると、“Your English is not good enough for the class. I recommend that you take English class first.”と言われましたが、この学期後に日本に帰る予定の私は、チャンスを逃したくない思いでクラスに留まることにしました。Dr. Michael の授業は、日本語で受けた心理学の授業を含めて、初めて講義内容が明らかに理解、納得できる授業でした。行動の原理、行動分析的な考え方が私に合っていたのでしょうか。これまで他の心理学の講義では満たされなかった部分が、初めて満たされたという気持ちでした。行動分析という言葉もほとんど知らない状況で、こういったすばらしい先生にめぐり合えたのは幸運だったと思います。最終的には A の評価を頂き、Dr. Michael から、“I was wrong. You do not speak English well but you can read.”とコメントを頂きました。この講義がきっかけとなり、行動分析の大学院に進学することを決意しました。

その後短期留学を終え、東京学芸大学を卒業し、大学院進学資金を稼ぐことを目標に、熊本少年鑑別所に心理技官兼教官として就職しました。この時、私の出身地でもある名古屋で開催された行動分析学会では、杉山尚子先生にもめぐり合えることができました（もちろん当時は杉山先生の活躍ぶりなどは知る由もなく）。熊本での 3 年間の内に何とか 3 百万円を貯金し



（注：その後、2 年間の修士課程で 3 百万ではとてもまかないきれないことがわかりました）、足りない部分は貸してくれと両親を納得させ、WMU と他にもいくつかの大学院の修士課程に申し込みました。WMU に申し込む際、研究室を Dr. Malott に選択したところ、後でわかったことですが、Dr. Malott と長年交流の深い杉山先生に「竹島という日本人の学生が出願してきたが、WMU でやっていく力があるかどうか」の問い合わせがあったそうです。ありがたくも杉山先生が強く推薦してくださったそうで、WMU からは合格の通知が届きました。

Dr. Malott 先生の修士課程は、私の生活観・世界観を変えるものとなりました。夏から始まる Behavioral Boot Camp（軍隊の始めのトレーニングにまねて、こう名づけられている）では、先生の著書を毎日 2 章ずつ読み、3 ヶ月間毎日、行動分析の原理の徹底トレーニングを受けます。このトレーニングでは、“Save the world with Behavior Analysis！”という合言葉を口にしながら、行動の原理をどのように毎日の生活に応用させるのか、どうやって行動原理を使って社会を改善させるのか、自分なりの例を生徒それぞれが考えるのです。行動分析応用の始めの一歩として、生徒の行動や自分自身の行動を、行動の原理を使って変えることを学びます。これまでそれほど勉強に意欲が出たこと

がなかったはずの私が、気がつけば、毎日起き
てから寝るまで、しかも睡眠を削ってまで勉強
し続けるようになり、先生のトレーニングがき
っかけになって、「私は一体どうなってしまっ
たんだ？」と自分に聞きたくなるぐらい、自分
自身の行動が明らかに変わっていくのを実感し
ました。Dr. Malott の研究室は、研究家ではな
く実践家を育てるのが焦点となっており、修士
課程は修士論文の代わりにプロジェクトを行う
ことで修了でき、博士課程でも、実践に合った
テーマで修士、博士論文を選ぶことができます。
これらのプロジェクトや論文課程は、自分の興
味（OBM、臨床、Instructional Design など）
を遂行するというよりも、幅広くどんな興味を
持った人にも共通して当てはまる Dr. Malott な
りの行動分析的世界観、行動の基盤を育てるも
のではないかと思います。先生の研究室を卒業
した人たちと話す機会があると、「知らず知ら
ずのうちに Dr. Malott に教えられたことをやっ
ている」といった会話になることがあり、あり
がたい教育を受けたと思います。

行動分析を使った臨床に興味があった私は、
発達障害の子供の学校や、ADHD や情緒障害児
の学校、矯正施設などにおいて経験を積むこ
とになりました。中で一番私に影響を与えたのは、
クロイデンスクールというところで、自閉症児
の早期教育をする実習の授業でした。学部生が
自閉症児に一对一の Discrete Trial を行うこの
実習授業では、実習生の教育から自閉症児の教
育、そして大学院生の生徒監督のスキルの教育
にいたるまで、すべての側面が行動分析によっ
て綿密に組み立てられているのです。この実習
では、短い期間においても、自閉症児の発達ぶ
りを目の当たりにすることができ、“Behavior
Analysis works! Save the world! One child at
a time!” とまさに実感することができます。自
閉症に興味のなかった実習生もこの実習を機会
に、将来のキャリアを自閉症・行動分析に変え
ることもめずらしくありません。もともと「特
殊教育に興味がない」と思っていた私も、行動

分析の見せるパワーに惹かれてか、気がつけば
何学期も続けてこの実習のクラスに関わり、結
局は Dr. Malott に誘われるままこの実習のマネ
ージャーとなって、博士課程まで修了していま
した。

大学院での実践経験がいかされて、就職は順
調に進みました。卒業後すぐにカリフォルニア
州サクラメントにある ABC School の Clinical
Director として就任、その後、サンフランシス
コベイエリアにある Behavior Analysts, Inc. の
Assistant Director、そして現在、同じベイエ
リアにある Fremont という学区の Autism
Resource Center（自閉症児早期教育センター）
の Director として就任しました。（私は WMU
で知り合ったアメリカ人女性と結婚したことで、
日本人でありながらも就労 VISA 取得を気にせ
ずに就職先を選べたことも付け加えなければな
らないでしょう。）センターでは自閉症児の早期
教育のプログラム、セラピストの監督、親教育
などを行いながら、学区の自閉症のクラスを
持つ教員を教育する立場にもあります。学区
は行動分析を基本概念とした団体ではないので、
直接の上司、それから職場の仲間はすべて別の
教育分野の専門家（教員、Occupational
Therapist、School Psychologist、Speech
Therapist など）であり、行動分析の知識と経
験に加えて、チームワークを要求される職務で
す。

カリフォルニア州を就職先に選んだのは、行
動分析に対する州の援助が得られやすいからで
す。州それぞれの自治が認められているアメリ
カでは、州によって自閉症児の教育、行動分析
の認められ方もそれぞれです。行動分析を使っ
た自閉症児の早期教育は集中的に行われること
もあって、州や学校、もしくは健康保険などか
ら資金が援助されない限り、裕福な家庭にしか
手の出ないサービスになってしまいます。カリ
フォルニア州では、州（主に Regional Center
を通して）または学区が自閉症を含むすべて
の発達障害児に適切な教育（主に自閉症では研

究によってその成果が明らかになっている行動分析などを使った教育)を施すことが義務付けられており、自閉症の診断ケースが増え続ける現在、行動分析家にとっては、常に就職先に困らない状況にあると言って良いでしょう。私は修士を修了してすぐ、BCBAを取得しました。現在カリフォルニア州では、行動分析を使う就職先にはBCBAが必要条件となる場合がほとんどです。学校区教育現場においては、親側からBCBAによる行動分析を使った教育を要求する件数も多く、特にバイエリアでは学校区が行動

分析を使う会社・学校に教育を依頼する状況から、学校区がBCBAを雇用して内部で行動分析を使った教育を提供する傾向に向かいつつあります。

行動分析はまだ新しい分野であり、アメリカでもその知名度、社会における認知度は常に向上し続けており、今後の進展が楽しみです。今後日本人の行動分析家がさらに増え、日本、アメリカなど場所に関わらず、“Save the world with Behavior Analysis!”の実践を期待しています。

<報告>

自主公開講座「第2回茨城行動分析研究会」報告

園山 繁樹 (筑波大学)

去る3月15日(日)の午後、筑波研修センターを会場に、標記の研究会を本学会の自主公開講座の助成をいただいて開催しました。本研究会は常磐大学の森山哲美先生の発案により、茨城県内に所在する筑波大学の園山研究室と野呂研究室、流通経済大学の山岸研究室が持ち回り当番制で集まって、年1回研究交流を行うものです。今回は一般の方々にも行動分析学を知っていただくために、公開講座としました。内容は以下の通りです。

第1部：特別講演

講演者：藤原義博先生 (筑波大学)

演題：「発達障害・知的障害をもつ人の主体的な生活をサポートする」

第2部：研究交流

- 1) 森山哲美 (常磐大学) 「行動分析学から見たヒトの愛着」
- 2) 島田茂樹 (常磐大学) 「発達障害のある子どもに対するソーシャルスキル訓練と早期発達支援」

3) 山岸直基 (流通経済大学) 「行動変動性を利用した行動獲得法」

4) 五味洋一・上野茜・飯島啓太・大森勝子 (筑波大学大学院) 「発達障害児への応用行動分析的アプローチ研究紹介」

5) 倉光晃子 (筑波大学大学院) 「知的障害者施設における職員の支援パフォーマンスに対するアウトカム・マネジメント (outcome management) の効果—自傷行動を示す自閉性障害利用者に対する余暇支援遂行における検討—」

発表内容は基礎から応用まで様々なテーマにわたり、基礎領域と応用領域のよい交流の場となりました。参加者は計54名で、約半数は本学会員ではない方でした。看護師、PT、施設職員、保護者等、いずれも行動分析学に関心を持っておられ、本会終了後に本学会への入会を表明された方も4名おられ、公開講座としての意義があったものと考えます。最後になりましたが、助成をいただきましたことを感謝申し上げます。

事務局からのお願い

担当常任理事 大河内 浩人

本年4月より事務局長を務めております大河内浩人でございます。3年間、どうぞよろしくお願いたします。

事務局の体制は次の通りになりました。武藤崇常任理事が事務局長補佐、土田宣明、吉岡昌子、上原誠子の3会員が事務局員として事務局を運営してまいります。いずれも先の3年間事務局にたずさわってきた経験豊かなメンバーです。

また、今年度より事務局業務を外部委託しております。会員の皆様から事務局へのご連絡、お問い合わせは以下の宛先にお寄せくださいますようお願いいたします。

〒540-0021 大阪府中央区大手通 2-4-1

リファレンス内

日本行動分析学会事務局

Tel/Fax : 06-6910-0090

E-mail: j-aba.office@j-aba.jp

このように事務局の体制は万全ですが、事務局長である私が頼りないのが心配です。藤理事長や武藤事務局長補佐、事務局員、そして会員の皆様のお力添えをいただいて、何とか任期を大過なく務められますよう、一心に願ひ、精進する所存です。今後ともどうぞよろしくお願いたします。

広報委員会からお願い： ニューズレター発行通知について

担当常任理事 園山 繁樹

このニューズレターの配布並びに発行通知につきまして、従来は、会員の希望により、①印刷物をクロネコメールで送付、②全文のPDFファイルをE-mail添付ファイルで送付、③E-mailで発行を通知、の3種類を行ってまいりました。今号より、学会のホームページが刷新されたこともあり、次の2つの方法とさせていただきますのでよろしくお願いたします。

ア) 印刷物を学会事務局（リファレンス）よりクロネコメールで送付。

イ) 発行通知を広報委員会より学会メンバーリスト beemail（ビーメール）にて送信

し、学会ホームページからダウンロードまたは閲覧していただく。

どちらかの選択は年会費納入用紙にて確認させていただきます。

ただ、今春の学会事務の外部委託に伴い beemail からアドレスが漏れてしまった方がおられ、再登録が必要となっております。学会ホームページにおいてもこの点周知されています。

上記イ)を希望される会員は、beemailの登録の確認をお願いいたします。また、このことについては、機関誌送付の際などを通して、全ての会員に改めてお願する予定であります。

編集後記

今号より、前任の望月要先生よりニューズレター編集部を引き継ぎました。園山を委員長に、青山謙二郎理事と野呂文行理事の3人体制となりました。春号と夏号を園山、秋号を野呂委員、冬号を青山委員が担当する予定ですので、ご寄稿の依頼の際にはよろしくお願いいたします。

今号は準備時間が短かく、またお忙しい中貴重な御原稿をお寄せくださいました会員の皆様に御礼申し上げます。特に今号から連載が始まった「海外で学ぶ学生、海外で働く専門職」に、まさに海外（米国）よりご寄稿いただきました竹島浩司氏に篤く御礼申し上げます。留学された経緯、Dr.Malott研究室での学びの様子など、学生会員はもとより、日本の会員に大きな刺激を与えていただきました。氏のお志“Save the

world with Behavior Analysis!”が、かの地で一層展開されることをお祈りいたします。

また、前国際担当理事の杉山尚子先生には、新連載の企画から竹島氏のご紹介まで、多くのご尽力をいただきました。関学のお二人に執筆いただいたABAI体験記も、これまでの国際交流の成果の一端であり、地道なご活動の賜物と考えます。

学会も新しい理事会体制となり、藤理事長を先頭に新しい歩みが始まりました。J-ABAニューズが会員の交流の場となり、学会の発展はもとより、行動分析学の発展と社会の問題解決に向けて何らかの貢献ができるよう願ってやみません。今後とも会員の皆様のご協力をよろしくお願いいたします。（園）

J-ABA ニューズ編集部よりお願い

- ニューズレターに掲載する様々な記事を、会員の皆様から募集しています。書評、研究室紹介、施設・組織紹介、用語についての意見、求人情報、イベントや企画の案内などです。原稿はテキストファイル形式で電子メールの添付ファイルにて、下記のニューズレター編集部宛にお送りください。掲載の可否については、編集部において決定します。
- ニューズレターに掲載された記事の著

作権は、日本行動分析学会に帰属し、日本行動分析学会ウェブサイトで公開します。

- 記事を投稿される場合は、公開を前提に、個人情報等の取扱に、十分ご注意ください。

〒305-8577 茨城県つくば市天王台 1-1-1

筑波大学障害科学系園山研究室気付

日本行動分析学会ニューズレター編集部

園山 繁樹

E-mail: sonoyama@human.tsukuba.ac.jp